

石狩の開拓の歴史

石狩の各地には、それぞれ、最初に次のような人たちが入植しました。

おやふる
■生振村

明治4（1871）年5月、宮城県宮城郡から29戸124名（引率者；米沢藩士 玉木琢蔵）

ばんなくろ
■花畔村

明治4年5月、盛岡県岩手郡から39戸129名（引率者；佐藤熊太郎）

みなみせん
■南線地区

明治12（1879）年、四国より14名

たるかわ
■樽川村

明治18（1885）年、山口県から2戸（引率者；河本荘七）

■高岡地区

明治18年4月、山口県那珂郡中津村から20戸106名

このうち、生振、花畔村の移民は、開拓使募集の募移民で、旅費、家屋、農具、3年間の食料、開墾料（1反に付2両）の補助のある開拓者でしたが、それでも開拓は軌道にのらず、離農するものも多かったのです。

その後、明治15（1882）年の開拓使廃止、同19（1886）年の北海道庁設置により、開拓は新たな時代を迎え、開拓移民の直接の保護は廃止されて、開墾した土地は、1,000坪1円で払い下げる制度となりました（明治30年に払い下げは無償となる）。また、殖民区画が設定され、石狩では明治26（1893）年に軽川（樽川）原野、花畔原野、生振原野が区画されました。こうして、各地への入植者は増えていきましたが、石狩の平野部は砂地か泥炭地でもともと地力が低く、また、石狩川の氾濫や冷害、虫害などの災害もあり、開拓は困難をきわめたのです。

そういう困難の中、開拓民は地区内で厳しい規約を結び、開拓を進めていきました。そうして、明治32（1899）年には、花畔村に362戸、樽川村に140戸の集落が作られていました。

（石井滋朗）

（1）石狩市教育委員会 文化財・博物館開設準備室（2001）ふるさといしかり。石狩市教育委員会。

（2）河野本道（2003）石狩市史／石狩市年表。石狩市。